

ブラジルに在る日本移民の同化に関する実地調査を目標に彼の地へ出かけたのは、昭和三十年九月だった。往路四五日間は、移民船に便乗して新移民の面会に追われ、十一月に彼の地へ上陸してからは、七ヶ所の地点を総勢五人の団員が適宜に分担して、三ヶ月間にわたって調査した。その後、移民問題のセミナーを先方の大学側と行い、昭和三十一年四月に帰国した。

この調査行は、意外なほどに全面にわたって成果を得たと思われるが、私にとつてとりわけ強く印象づけられたのは、自分の分担した七地点中の二ヶ所の調査である。この二ヶ所は、ともに南ブラジルのパラナ州の北部地方、北パラナと通称されるコーヒーの新地帯にあつた。一九五一年に賦給林に莽が入られたという開拓最前線の一地帯と、二十数年の発展の歴史をもつ日本人多数が集居居住している植民地である。

この二地点の調査に当つて、私は、何よりも先に、対象地域に成立している都郵共同体全体の構造分析を行い、その過程乃至結果から居住日本人の共同体内部における地位と役割を見定めてゆき、さらに意識その他生活様式一般の考察を加えて、同化問題の展望を得るという方針をとつた。アメリカ農村に通じるこの種の都郵共同体の構造分析に対して、強い関心をもつていたからにはほかならない。

さて、アメリカ農村社会学に関する知識を基礎に、見聞したブラジルについての多少の理解を附加しただけの準備で、最初に乗込んだ開拓前線の地域の調査一ヶ月は、たゞ

夢中だつたといえよう。州政府から払下げをうけた原始林、その面積は日本風という約三万五千町歩が、一九五一年から成る土地会社によつて開発されつゝある。開発の拠点であり、周囲の農場地帯の中心とすべく建設された市街地には、すでに三百五十世帯余、千八百人位の人々が移住してきて、一五、田舎町の外観を呈している。農場地帯として指定されている区域の原始林は、三分一以上既に払われてコーヒーの植付けがすすんでいる。着々と、いわゆる都郵共同体が生成されつゝある地域だつた。

こゝには、日本人は市街地に十数ヶ家族、農場地帯に三十家余が移入しているだけだ。あの西部開拓の舞合さながらの發展と雰囲気なかでは、開発に當つては土地会社の協力をとじいづを運搬し運送を勤めてくれる同姓の日本人準一世の助力が有難かつた。また、見るもの聞くものが全容面白かつた。国内の商業資本が行う開発方式、そこに計画されていく都郵共同体の賦給納税仕組み、また、その計画にそつて移入してくる人々の性格、その人々が市街地において、農場地帯において構成する階層の關係、そして、土地会社の支配を中心とした政治構造、さらに、これらが展開をはじめてゆく諸相などを勉強した。とくに、「出現しつゝある都郵共同体」ということに留意していたつもりである。

次の一ヶ月間は、日本系の土地会社が一九三〇年代に開発に着手し、現在約四万二千町歩の土地に三万二千人ほどの人口を算する植民地に、一ヶ月間をすごした。全人口の約三

分の一が日本人乃至日系人だし、右の調査地へ移出した日本人大卒の居住地だつたので調査地とした。しかし、開発がほぼ完了し、農業生産の安定をみた地域という点で限りない興味があつた。二十数年の間にどのような展開をとげ、どんな稼相をもつようになるのかを、前章例との対比で考えてみた。都郵共同体の成立と發展の骨組みをうかがひたかつたからだ。

以上のような気持ちで仕事をしてきた。しかし、二事例からでは、勿論、充分なこととはわからぬ。二地点の調査中にも、対照的のみられる一面をもつ隣接地を巡つてもみたが、月並みに、ブラジルと一口にいっても日本の二十数倍の広さだからとやうことになりそうだ。いくらじいづを足にしていたといつても現地の人々の協力を得たといつても、二調査地は、私一人の調査としては広く大きかつたしたがつてこゝで、一口や二口で都郵共同体について説くことはむづかしい。卒直なところ、二事例の調査結果をかなり細かく記述した報告書が本屋に渡つていたので、それを御覧いたゞいて、御教示を賜りたいと思つてゐる。

なお、主題とした日本移民の問題で得たものの若干を挙げれば、次のようになる。二十世紀の初頭までアメリカにも現存していたという「農業における階層上昇の様子」は、今もブラジルには豊に用意されている。これが外国移民の魅力だし、「貧賤の格差」を特色とする北米と区別するブラジル移民の型を形成する基軸でもある。日本移民の問題も、多

くはこの「彈子」をめぐつて發生している。昇る速度の緩急、昇り方の姿勢などに、いわゆる日本農民の社会的性格がどぎつくりにおみ出てくると、不同化が指適される。しかも、現在この「彈子」の段でいえば、多くが小農場主層になつてゐる日本人は、家族労力を基幹とする経営をし、独立段の自由をもつ故に日本農民の性格は表現され易い。それにしても、特殊な食物、宗教、親族組織、さらに、旧來の家族制度と農本主義の意識は、益々人々の心をとらえているものであると感心した

(北大文学部助教授)